

バスの後部座席

馬場 良二

コロンブスのアメリカ大陸発見が1492年だから、あれは1992年だったと思う。そう、結婚した年、前の年から準備していた出張だからということで、妊娠している家内を韓国に残して出発した。やはり1992年だった。コロンブスのアメリカ大陸発見から500年をキャッチの一つにして、ブラジル、リオ・デ・ジャネイロ連邦大学文学部で学会があった。

さすがリオ・デ・ジャネイロ、やることが派手で、前夜祭までもうけてあった。リオ・デ・ジャネイロ市が位置しているグワナバラ湾のナイトクルーズだ。カクテル片手に夜風を受けながら軽くサンバでも踊ったに違いない。日本の学会と違って夫人同伴が多かった。私はサンパウロの知人を訪ねて行って参加できなかった。

中日（なかび）には、市長主催のカクテル・パーティーがあった。ホテルから観光バスで市長公邸に移動した。到着すると、長身の兵士が軍服の列でアーチを作り迎えてくれた。1978年に留学していたときに日本語のスピーチコンテストがひらかれた建物に違いない。ジャングルのような庭園に立つ石造りの建築だ。開け放たれた屋敷にあふれるほどの人々、胸の大きく開いたイブニングドレス、ボーイが盆にのせて運ぶ飲み物、食べ物は、またたく間になくなっていく。華やかな喧噪。

カーニバルがはじまった。9月だったと思う。2月の本番の時の衣装をバスに積み込み、踊り子と楽器奏者とが20人ほど、庭を練り歩く。私はまだ若かった。気恥ずかしくて、おりていって踊ることができなかった。

と、夜の嵐がやってきた。レースのカーテンが舞い上がり、空が光り、雷鳴がとどろいた。熱帯の雨に濡れ、パーティーはお開き。現実とは思えないほどドラマチックだった。

サンパウロに行ったのは、ジェファソンに会うためだ。1978年から2年間、ブラジルはリオ・デ・ジャネイロに留学した。その数年前にリオを訪れた恩師が言っ

ていたとおり、リオは夢のように美しい街だ。輝く大西洋、白い砂浜、海岸沿いに幹線道路が走り、シャレた高層アパートが軒をつらねる。

リオでは連邦大学の文学部に在籍し、言語学や音声学の授業を聞いていた。知人の紹介で知り合った、日本語を学んでいる他大学の学生がジェファソンだ。学部の卒業式に出席し、段にあがったところを写真にとった。私が帰国してしばらくすると、日本政府の奨学生となって東大にやってきた。専門は農業政策だったと思う。博士まですすみ、帰国、当時はサン・パウロの東京銀行に勤めていた。

同じころ知り合ったのがネルマだ。ネルマもジェファソンも日伯文化協会で日本語を勉強していたように思う。ネルマはリオの連邦大学、文学部を卒業し、ポルトガル語、つまり、国語の先生をしていた。驚くほど美人の三人姉妹＋弟だった。

二人とはよく会った。三人で日本語の授業をしたり、ネルマと芝居を見に行ったり、ジェファソンと美術館に行ったり。よく話した。あの頃は、夢もポルトガル語で見えていたが、それでもブラジル人の言うことが100%分かっていたわけじゃない。でも、二人の話すことはすべてわかったし、言いたいことは何の苦もなくすべて伝えることができた。

ジェファソンはサン・パウロに引っ越していたが、ネルマはかわらずリオにいた。ネルマとはパオン・ジ・アスーカにのぼった。リオの観光写真には必ずと言っていいほどあらわれる小さな岩山だ。ロープウェイで頂上までのぼる。ジェファソンとは日本で会っていたが、ネルマとは丸々12年ぶりだった。

相変わらずだった。私は коммуニストだと言っていた。日本には必要ないが、この国には今、 коммуニズムが必要だ。当時、ブラジルの大統領はフェルナンド・コロルといい、不評をかっていた。若くて顔がいいから当選しただけだというもっぱらの評判で、経済は乱れ、未曾有のインフレだった。Tシャツを買おうとしたら正札に値段がない。札にある番号を値段表にてらし、その日の価格を知る仕組みになっていた。あまりのインフレに札に価格を書き込めないのだ。治安も悪化していた。途中よったニューヨークでは、グリニッジビレッジを夜、家族連れが散歩していた。なのに、リオではアパートの建物に鉄作が張り巡らされ、電動の門扉がついていた。大統領が国を食い潰したのだ。

リオの人たちは疲れていた。幹線道路をバスで走っているとき、後ろのバスに強盗がでたことがある。こちらのバスの誰かが気づき一瞬ざわついたが、すぐにみんな

な押し黙った。

映画を見ようと思ったが、ブラジルで作られたものがない。専門書もうすっぺらなペーパーバックになっていた。映画を撮る力も、本を印刷する力もないのだ。

インフレがひどいので先がわからない、計画を立てることができず、何もできない。本を買うか、髪を染めるか、お金がないからどっちなにしくちゃならず、本を買った。髪には白髪がまざっていた。今もその薄っぺらな言語学の専門書が棚にのっている。

1980年、留学から帰国するときは、日本人の友人にまざってエレガントなお姉さんが見送りにきてくれた。出張からの帰りには、ネルマー一人が空港まで来てくれた。

そのお姉さんかもう一人のお姉さんかはわからない。手紙には、ネルマがなくなったと書いてあった。何通もの手紙がゆきかった。何十年かの友情は素晴らしいとも。リュウマチの薬が強かったそうだ。

リオには日本人学校があり、サトウのおばあちゃんはそこの音楽の先生の身の回りの世話をしていた。ポルトガル語で言うならエンプレガーダだ。日系移民の一世で、御主人と二人で九州からやってきたという。留学中はずいぶんお世話になった。毎晩のようにその先生のところで夕飯をごちそうになっていた。つまりは、サトウのおばあちゃんが作ってくれていた。

社会に出て、熊本に赴任し、結婚もしましたと、会いに行った。コパカバーナのアパートに息子夫婦と住んでいた。先生と二人で贈った金縁眼鏡をかけていてくれた。陽射しのまぶしい通りにでると、ハンバーガーをご馳走してくれ、露店でピンクの輝石のネックレスを買ってくれた。今でも、頼まれて助産に行くという。ご主人なきあとは、エンプレガーダと産婆で生計を立て、子どもたちを育て上げたのだ。

父をなくしたのは高校3年になって間もなくの6月だった。体調が悪いと通院し、良くならないと病院をかえたら、すぐに入院、あつと言う間だった。

数年前の同窓会、高校のときの修学旅行の話が出た。修学旅行は高校3年の5月だった。宮崎のホテルのビリヤードで、慣れない球にねらいをつけた目がさだ

まらなかったのを覚えている。その時、団体旅行の出発にしたいが間に合わない夢、大きな旅館で自分の部屋に行きつけない夢を見る理由がわかった。同窓会以来、ほとんど見なくなった。あれは17になったばかりだったのだ。私はまだ子どもだったのだ。

入院していた病院は父の会社の近くで、家からはバス停までも遠かった。何年かたってから姉から聞いたのだが、そのバスの中、母は最後部のすみの席にすわり毎日泣いて帰ったという。

リオで最初のアパートはロータリークラブの紹介だった。リオではアパートの一部屋を間借りで人に貸すというのはごく多く、私もコパカバーナに居をさだめた。でも、大家とそりが合わず、知り合った日本人のところどころがりこんで、その日本人の知り合いが出た部屋に移り住んだ。そのアパートの持ち主がドナ・エディットだった。

ドナ・エディットは、ハンガリーの大きな農園に生まれ、歌姫だったという。ときどき昼下がりにピアノを弾きながらアリアを歌っていた。なくなったご主人は実業家で、水力発電の会社を経営していたそうだ。リオの大通りの名にもなっているヴァルガスというブラジルの父とも言える大統領とならんで映っている写真が飾ってあった。

かつては屋敷もあったし、アパートもいくつも持っていた。少しずつ売って、今は私に一部屋貸しているアパートがあるだけ。居間にはアップライトのピアノと豪華なシャンデリア。不思議なシャンデリアで、真夜中でも何かしらの光を壁に反射する。中国風の骨董のバー・ボックスも重厚だった。

すべてを売り払って養老院にはいるから、「ヨーツ、出て行ってくれ」と言われたのは1年もたないころだった。ブラジル人にもハンガリー人にもアメリカ人にも「リョウジ」という発音はむずかしいらしく、みんな私を「ヨーツ」と呼ぶ。

街に用事をたのまれ、行って戻るとワニ革のでっかい女性用のバッグをくれた。これも売るんだとでっかいダイヤやルビーの指輪を見せてくれたこともある。私が出て、ドナが順番をまだ待っているころ、たずねたことがある。シャンデリアを私の弁護士が500クルゼイロで持って行ったと言う。5000円だ。

用事があったから頼んだのではなく、バッグをやりたいから用事を作ったのだろうし、ダイヤもルビーも高く売りたいからではなく、買える値段で分けたかったの

だろうと思う。活字の古めかしい年代物のタイプライターは、私が手紙を書けなくなるからと、売ろうとはしなかった。

一度、姪だという若い女性がイスラエルから遊びに来た。子どものころはかわいくてお尻にまでキスをしたものだと言う。子どもの頃はブラジルにいたのだろうか、それとも、ドナがイスラエルにいたことがあるのか。

ドナのうつった養老院はユダヤ人のためのケア・ハウスだった。帰国前にたずねたことがある。緑につつまれた清潔で瀟洒な建物。こじんまりとした部屋には馬のたてがみがつめてあるというベッドがあった。腰にいいそうだ。そのベッドにすわり、ひざを気にする。足を床につくとひざが痛いので、このベッドの高さがいいと言う。

ケア・ハウスをおいとまするとき、ドナは玄関口まで送ってくれた。そして、両ほほにキスをして、「アテ・ローゴ（では、また）」と言ってくれた。

1992年、またドナを訪ねた。受付で部屋を聞き、廊下をすすんでいると、やってきた看護師が「私はお前を知っている!!」と言う。何やら写真で見たようなことを言う。案内された部屋は彼女の部屋ではなく、病室だった。白い鉄枠のベッドの枕元にはフレームに入った写真が一枚。結婚衣装をまとった家内と笑っている。ドナは私を見ると、「ヨーッ」と言い、そして、「Dodói」。診察中の医師は、股関節を痛め、ボルトをいれてあると説明する。Dodóiは、dor「痛い」の幼児語だ。

肉親も親せきもブラジルにはいないと言っていたが、サン・パウロには弟がいたようだ。

毎年クリスマスにはカードが届いた。そのカードはいつから途絶えていたろう。

養老院からの帰り、私はバスの一番奥の座席にすわり、エディットを思っ泣いた。